

## ばかばかしい一年か？

二〇〇二年は我が家にとって、良い事がひとつも無かった一年だった。アンラッキーぶりをすべて紹介する気はないけれど、一月には大量に降った季節外れの雨のせいで天井裏がダムのようになり、それが決潰して一部屋が台無しになったし、十一月にはほんの数時間夫婦でスーパーに買物に行ったすきに、窓ガラスを破って空巣が入り込み、家じゅうを探られた。などを挙げておけば十分だろう。

新しい年は、その反動でラッキーの連続を、とまでは期待しないけれど、せめていつもの年並みに平穏であってほしい。

それにはやはり夢見が良くなければならぬ。とすれば縁起の良い初夢から新年が始まらなければ困る。「一富士二鷹三なすび」がそれだ。この縁起の良さを誘うのは、確か枕の下に七福神の乗った宝船の絵を入れて寝るのが良いらしい。-なんて、えらい古めかしい事を思い出したが、どうもこんなに古風なもので二十一世紀は乗り切れないようにも思う。

それにしても昔の人の夢には“音”が無い。初夢にも七福神にも音の出るものがない。江戸の昔は現在のように音は氾濫していなかった。

実は、私のばあい、色や形よりも音のほうが、眼覚めた後もずっと残るのが普通なのだ。皆さんが私と同様なのか、私だけが奇妙なのかは知らないが、私の場合、大ていの朝は“音”というよりは“音楽の一節”で目覚め、しばらくそのメロディが頭の中でくり返されているのが普通だ。でも、カラオケは好きじゃないし、歌番組を見るのもそう多くない。それでいて、美空ひばりのリンゴ追分やら、五輪真弓の恋人よやら、童謡の里の秋やら、その朝によっていい加減の一節が頭に浮んだまま眼が覚める。

そこでごく新しい発見をした。近頃、我が家の周辺を廻りはじめた“石焼きいも”の呼び声は、あの“テネシーワルツ”の一節とメロディーが同じという事。私の夢の中で、“石焼きいも-あのテネシーワルツ”とずっと響き渡った。これが初夢なら、二〇〇三年は私にとって、何ともバカバかしい年になりそうだ。